研究発表

「1年次教育における情報リテラシー教育」の講習モデルを作成する

第4期　情報リテラシー教育研究分科会

1．はじめに

図書館員が情報リテラシー教育*[1]を行うことについては、教員と図書館員との間において、また図書館員内においても賛否両論あり判断が難しいところである*[2]。確かに情報リテラシー教育の「教育」という面から考えると、「教育」のプロである教員が行うほうが望ましいのかもしれない。

しかし我々は、図書館に関係のある情報リテラシー教育については、図書館学に詳しい教員（例えば図書館学の教員など）がいる場合は別として、現状の図書館に最も詳しい図書館員が行ってもよいのではないか、という考えのもとに研究を行っている。

今回作成した『1 年次教育における情報リテラシー教育の講習モデル』は、我々の他、講習を行う側（分科会メンバーが所属する図書館のスタッフ、レファレンス分科会のメンバー等）と、受ける側（学生モニター）の意見を参考にしている。今後も色々な立場の意見を幅広く取り入れ、より現状に見合った内容のモデルに改善していきたい。

2．研究概要

我々の研究目標は、1年次教育の一環として図書館員が行う、情報リテラシー教育の講習モデルを作成し、そのモデルを現在行っている各大学図書館の情報リテラシー教育に反映させることである。

2-1　教育対象者から考えるモデルのレベル

まず一般的なモデルを作成するにあたって、教育対象者である大学学部の新入生が、大学に入るまでに受けてきた情報リテラシー教育の内容について文献調査を行った。

その結果現在の高校では、情報リテラシー教育として「情報A」、「情報B」、「情報C」の3科目から、いずれか1科目が選択履修されていることがわかった。この3科目の目標や内容はそれぞれ異なるが、コンピュータの使い方、コンピュータでの情報処理（データベース、アルゴリズムなど）などの説明が主であり、図書館の利用方法に対する説明など、我々が考える情報リテラシー教育はあまり触れられていなかった。

また講習を行っている中で、独学などで高い情報リテラシー能力を有している学生といない学生といったように、学生の情報リテラシー能力には差があることがわかった。

このような差を無くし、皆に一定以上の情報リテラシー能力を習得してもらうためには、全く基礎からの内容のモデルにすることが望ましいが、教える量と教えるのにかけられる時間などを考慮すると実現は難しいと考える。

そのため、今回のモデルにおける教育対象者は初歩的なコンピュータの使い方（キーボード入力など）を理解していると想定する。そして講義内容についていけない学生については補助者がサポートする形式を取ることにした。

2-2　現在の実施状況から考えるモデルの内容

次にモデルの内容を決定するため、現在の情報リテラシー教育の傾向について調査を行った*[3]。その結果、1年次においてOPACの使い方を、また上級生でデータベースの使い方を説明する事例

が多く、検索技術の指導を重視した傾向があることがわかった。

以上を踏まえて今回作成するモデルは、従来の検索技術指導を重視した内容で終わりにするのではなく、なぜ情報リテラシー能力が大学の勉強に必要なのか、そもそも情報リテラシーとは何か、といった概念的説明も足すことにした。

2-3　現在の課題と解決案

次に現状の課題に対応したモデルにするため、現在の情報リテラシー教育の問題点を確認した*3。

(1)　いかにして学生に関心を持たせるか

分科会メンバーが対応に苦慮している問題として、自由参加形式の講習にすると学生の参加率が低い、あるいは限られた学生しか参加しないなど、学生の講習への関心の低さがある。

こうした状況において全ての学生を講習へ参加させるためには、講習自体を授業科目の一部（必修科目の１コマなど）に組み込んで実施し、講習への参加を強制する方法などが考えられる。しかしこの対処法では、学生は講習に参加しても途中で居眠りをする、あるいは私語をするなど、実状は講習を聴いていないといった問題は解決できない。学生を積極的に講習へ参加させるためには、学生にとって魅力のある講習を行うことが必要であると考える。

そのためには、コンピュータ実習を加えるなど一方的に講義を行う形式を避ける、また学生に対し講習で得られるメリットを示し、講習への興味を持たせること等を含んだモデルであることが望ましい。

(2)　人材不足から生じる実施負担への対応

もう１つの問題として、説明者の不足から生じる実施の負担がある。大学によっては、一部の担当者のみが講習を実施するなど全新入生を対象にした講習を実施することは負担が大きい。

こうした状況への解決策として、情報リテラシー教育のマニュアルを作成する案が挙げられた。マニュアルに沿うことにより、誰でも一定した内容の講習を行うことが可能になる。そのため、現状より多くの図書館員へと実施の負担が分散されると考える。

また、映像資料のような補助教材を利用することで少人数での実施を可能にし、その結果、実施する負担が軽減されるのではないかと考える。

３．作成したモデルについて

以上のポイントを踏まえ、我々は以下の講習モデルを考案した。

使用する映像資料（Microsoft Power Point で作成）については、紙面の都合上掲載は省略する。

（映像資料を掲載しているホームページ）

http://www.jaspul.org/e-kenkyu/joholite/

3-1　モデル概要

教育対象者は、全体オリエンテーションなどで簡単な図書館案内（利用方法など）を受けた学部新入生とする。また、初歩的なコンピュータの使い方は理解しているものとする。

実施者は、説明者と補助者、図書館職員数名を想定する。補助者は授業の補佐や学生の支援などを行う。

講習を実施する時期は、大学の勉強が本格的に始まるまでに習得させたいことからも、新学期初めに行う１年次教育の一環として行うものと考える。

時間構成については、必修科目の授業１コマ 90 分を使い、60 分を講義、30 分を実習にあてるものとする。

内容は、2-2 で述べた内容と、情報リテラシー能力*1 の①②③⑦の項目、OPAC の説明及び実習である。

3-2　実施方法について

(1)　講習前半（講義とコンピュータ実習）

講習前半は、映像資料を使用した講義形式とする。実施者は映像資料を操作しながら説明を行う。そのため映像資料を補助モニターやスクリーンに投影し、学生が説明を聞きながら映像を見ること

ができる館内または館外の環境で行う。

また学生は説明に合わせてコンピュータ実習を行い、配布された課題用紙の問題を行う。この問題の答え合わせについては、講習の説明の一環として行う。課題の箇所はまず空白の四角で表示させ、学生に説明を聞きながら空白に答えを記入させる。その後四角の中に答えを表示し確認させる。

(2)　講習後半（図書館での実習と施設見学）

講習後半は、図書館においてOPACで検索した本を書架から探す実習を行う。学生は課題の本を探し、課題用紙と探した本をカウンターに提出する。実施者と補助者は迷っている学生に対し、本棚の見方を再度説明するなどサポートする。またブラウジングによる本の探し方など、OPAC以外にも本を探す方法があることを説明する。

実施者（あるいはカウンタースタッフ）は、課題用紙に書かれた本と学生が実際に探してきた本が一致しているか確認する。一致していた場合は、学生に講習終了の許可を出す。この時課題用紙は回収し、後日教員を通じて学生へ返却する。

時間に余裕がある場合は、実習後に図書館施設見学も行う。

3-3　講義内容について

まず大学の勉強について、高校までの勉強と比較しながら説明する。そして大学の勉強において必ず出てくるレポートを取り上げ、レポートには内容が保証された情報による根拠付けが必要であることを説明する。

次に内容が保証された情報を探す方法として、インターネットと本を挙げ、それぞれの特徴を説明する。そして、探している情報の種類に応じて情報を探す方法を使い分ける必要性を説明する。ここで説明を一区切りとし、これまでに説明してきた内容をまとめ、課題をさせるなどし理解を促す。

次に情報を探す方法の一つである本について、特に大学図書館にある本の探し方（OPACの使い方）を実習とともに説明する。またOPACで検索できる本の範囲について説明し、所属する大学の図書館以外の本を収集するには、公共図書館のOPAC、WebcatPlus、書店などの出版情報も検索することの必要性を説明する。

最後に収集した情報をどのようにレポートに取り入れるのか、著作権の説明を交えて説明する。

3-4　モデルの特徴

(1)　映像資料について

対象が新入生なので、分かりやすさ、親しみやすさに重点を置く。そのためイラストを多く使用し、また説明に合わせたアニメーションにより学生の注意を引きつけ、覚えて欲しい箇所などの印象付けを行う。

(2)　課題について

講習の最後に課題を提出させることで、学生が講習の途中でいなくなることを防止し、説明を聞きながらやらせることで、学生の注意を引くこと（例：居眠り、私語の防止）に役立てる。

さらに課題は、学生の理解度を把握する以外にも、裏面を講習に対するアンケートに利用し、講習に対する学生の意見を集め、より良い講習の実現に活かす。

(3)　取り上げた情報リテラシー能力*[1] の項目について

時間・量の問題から、すべての項目を取り上げることは難しいため、最初に理解してほしい①②と、③④⑤⑥⑦から、新入生にとって身近で、理解しやすい項目を選択することにした。新入生が調べものをするとき、真っ先に使うであろうツールが、インターネットと本であること、また、これまでのガイダンスの経験から、図書と雑誌、インターネットとデータベースなどの組み合わせは、学生が混同しやすいこともあり、③と⑦を選択することにした。

(4)　講義の流れについて

講習前半で行う講義は、レポートを作成するまでの工程に添った形で説明する。これにより講義内容に一連の流れができ、情報リテラシー能力*[1]

の項目を別個に説明するより、学生が内容を理解しやすいと考える。

４．考察

モデルの作成からわかったことは以下の３点である。

4-1　マニュアル作成の困難さ

まず、全ての大学で共通に使用できるマニュアルを作成することの困難さがわかった。

その理由として、図書館員による情報リテラシー教育にかけられる時間が挙げられる。大学によっては、必修科目に組み込んだ実施が不可能であったり、実施できてもモデルで設定した時間の90分が取れない場合がある。逆に、図書館員による情報リテラシー教育を１つの科目として行う大学があるなど、状況が異なるためである。

また内容についても、大学ごとに求められるレベルは異なっている。説明項目が多すぎる、あるいは少なすぎるといった色々な意見があり、一概にこれだけ教えればいいと言い切れないことがわかった。

さらに施設設備の面についても、コンピュータ台数の不足、講習を行うスペースの有無といったように、大学ごとに環境が異なっているため、モデルで想定している環境が整わないことがある。

こうしたことからも今回作成したモデルは、変更不可能な絶対的な基準としてではなく、１つの教材素材として捉え、各大学の状況に合わせて、内容を追加、削除、組み合わせるなど、自由に加工して使用すれば良いと考える。

4-2　時間制約から見直す説明方法と内容

次に、90分という時間内において教えることの困難さが挙げられる。

今回のモデル内容は量が多く、何が本当に重要なのか学生が理解しにくいのではないか、といった意見が出るなど、説明方法の更なる工夫が課題である。

説明の工夫の一例として、実施形態の変更が挙げられた。これは講習を 90 分の１回ではなく、45分ずつの２回に分けて行い（例：初回は情報リテラシー能力①②⑦を、2 回目は③を説明するなど）個々の項目の理解をより簡易にする方法である。

しかしこの数回に分けた実施には、必修科目の講義の１コマを利用し実施する以上に、図書館員による「情報リテラシー教育」に対する教員の理解と協力が必要になってくる。そのため実現は難しいのではないかという意見も出された。今後も検討が必要な項目であると考える。

4-3　教員と協力した教育体制の必要性

今回のモデル作成を通じて改めて感じたことは、図書館員と教員が協力した教育提供の必要性である。講習により得た情報リテラシー能力を使用する機会がなければ、本当の意味で学生の身に付かない。そのためには、教員に講習を実施した授業以外でも図書館の利用を積極的に促してもらうなど、習得した能力を活用していく教育環境を図書館員と教員とで協力して提供していくことが必要であると考える。

５．今後の課題

以上のことを踏まえた今後の課題は、全ての学生に同等の情報リテラシー能力を身に付けさせるために、情報リテラシー教育を学ぶ機会を提供すること、そして教員と連携した教育体制を充実させることである。

そのためには、情報リテラシー教育を１年次教育として実施して終わりにするのでなく、2年、3年、4 年となっても行っていく実施の継続性と、従来の図書館独自で行っていたガイダンスなどとあわせ、色々な場面で、学生が情報リテラシー教育を受けられるように、実施に多様性を持たせることが必要であると考える。

また講習を聞いた学生が、大学の勉強や情報リテラシーに対し、なにかとても難しいものだと身構えてしまったり、利用を躊躇してしまっては、

情報リテラシー能力を習得し、大学の勉強に活用することを進めている講習の意味がなくなってしまう。講習で得た情報リテラシー能力を、情報を効率的に入手し活用するための一つの手段として認識し、積極的に活用しようと思えるような講習をいかに行っていくかも今後の重要な課題であると考える。

次年度の例会には、これらの課題を踏まえ、今回作成したモデルの改善、あるいは他学年向けのモデル作成などを期待する。

【注釈】

＊1　本分科会では「情報リテラシー能力」を下記の項目とし、「情報リテラシー教育」を、下記の項目を習得するために、図書館の利用を前提として行う教育を指すものとする。参考文献 11）参照

① 情報リテラシーとは何かを知り、その必要性を理解する
② 情報の生成と流通について理解し、媒体の理論と特徴を理解する
③ 図書の探し方と入手方法を理解する
④ 雑誌記事の探し方と入手方法を理解する
⑤ 新聞記事の探し方と入手方法を理解する
⑥ その他の情報源を知る
⑦ インターネット上の情報源を利用する
⑧ 情報を評価する
⑨ 情報を活用する

＊2　情報リテラシー教育における図書館の役割に対する意見の相違は、参考文献 28）を参照している。

＊3　今回の調査対象は、分科会メンバーが所属する大学図書館が 2008 年 5 月時点で実施している「情報リテラシー教育」についてである。

（対象校）

① 大東文化大学
② 東京家政大学
③ 東洋大学
④ 横浜商科大学
⑤ 立教大学
⑥ 和光大学

【参考文献】

1) 榊原洋一著. ササッとわかるアスペルガー症候群との接し方. 講談社, 2008, 109p.

2) 杉江修治[ほか]編著. 大学授業を活性化する方法. 玉川大学出版, 2004, 187p.

3) 天野明弘[ほか]編. スタディ・スキル入門：大学でしっかりと学ぶために. 有斐閣, 2008, 245p.

4) 世界思想社編集部編. 大学生学びのハンドブック：勉強法がよくわかる!. 世界思想社, 2008, 126p.

5) 藤田哲也編著. 大学基礎講習：充実した大学生活をおくるために. 北大路書房, 2006, 221p.

6) 図書館用語辞典編集委員会編. 最新図書館用語大辞典. 柏書房株式会社, 2004, 643p.

7) 味岡美豊子. 社会人・学生のための情報検索入門. ひつじ書房, 2009, 208p.

8) 藤田節子著. レポート・論文作成のための引用・参考文献の書き方. 日外アソシエーツ, 2009, 144p.

9) 大城善盛. 情報リテラシーとは？：アメリカの大学・大学図書館界における論議を中心に. 情報の科学と技術. 2002, 52(11), p550-556.

10) 上岡真紀子, 市古みどり. 図書館員による情報リテラシー教育：現在・過去・未来. 現代の図書館. 2007, 45(4), p226-233.

11) 上岡真紀子. 大学 1 年生の情報リテラシー能力の分析：日吉メディアセンターの試み. 大学図書館研究. 2003, 69, p42-52.

12) 内堀勇二, 樋口知義[他]. 情報リテラシー教育業務マニュアル骨子の整備化：図書館員が主体となって企画・運営する情報検索ガイダンス. 私立大学図書館協会会報. 2008. 9 (130) p128-132

13) 瀬戸口誠. 情報リテラシー教育とは何か？. 情報の科学と技術. 2009, 59(7), p316-321

14)野末俊比古.情報リテラシー教育と大学図書館 -「利用教育」から「指導サービス」へ.図書館雑誌.2008.11,102(11),(1020),ｐ762-765
15)大谷朱美.教員の連携による情報リテラシー教育支援-東京学芸大学附属図書館事例報告.現代の図書館.2007.12,45(4),(184),ｐ213-219
16)石川敬史.大学図書館の新入生オリエンテーション-情報リテラシー教育への位置づけ
として.大学と学生.2006.6.(29),ｐ33-41
17)大城善盛.わが国の大学図書館における情報リテラシー教育に関する考察.大学図書館研究.2004.12,72, ｐ10-17.
18) 安藤友張. 「情報リテラシー」「情報リテラシー教育」「図書館利用教育」をめぐる最近の動向.短期大学研究.2003,(23), ｐ19-25
19) 杉田いづみ,河谷宗徳[他].三重大学附属図書館の情報リテラシー教育支援.情報の科学と技術.2002.11,52(11), ｐ550-556,
20) 平尾行雄,布目和美[他].大規模大学の１～２年生に対する情報リテラシー教育とメディアセンター.大学図書館研究.1998.12,54, ｐ33-42
21) 慈道佐代子.全学共通科目「情報探索入門」の試み：図書館の役割について.大学図書館研究.1998,12, ｐ43-54.
22)大城善盛.大学図書館界を中心とした情報リテラシー論:アメリカ、オーストラリア、イギリスにおける論議を中心に. 大学図書館研究.2008,3, ｐ23-32.
24)慈道佐代子.情報リテラシー教育の理論的枠組みと大学図書館における実践についての考察
大学図書館研究.2005,12, ｐ44-53.
25) 慈道佐代子.一年次教育における図書館の役割：図書館が参加・実施する情報リテラシー教育を考える.大学図書館研究.2008,3, ｐ12-21.
26)上原恵美.琉球大学附属図書館における情報リテラシー教育.大学図書館研究.1998,12, ｐ55-65.
27) 青山弘.「授業と連携した」図書館ガイダンスの可能性：岐阜大学の事例を中心に.大学図書館研究.2002,8, ｐ58-66.
28) 瀬戸口誠. 情報リテラシー教育とは何か:そのアプローチと実践について.情報の科学と技術.2009.7,59(7), p316-321.

【参考ホームページ】

1)慶應義塾大学図書館 KITIE
http://project.lib.keio.ac.jp/kitie/index.html (参照 2009-06-30)
2)レファレンス研究分科会.レファレンスサービスと情報リテラシー教育:国公私立大学図書館の取り組み事例
http://www.jaspul.org/e-kenkyu/reference/07houkoku/houkoku07.pdf (参照 2009-07-15)
3) ソザイヂテン
http://www.sozaijiten-business.rash.jp/index.html (参照 2009-08-25)
4) 国立国会図書館.レファレンス協同データベース
http://crd.ndl.go.jp/GENERAL/servlet/common.Controler (参照 2009-09-3)
5) NPO 法人大学図書館支援機構.レポートの書き方の基本
http://www.iaal.jp/xoops/sogoten07/liter_sample.pdf (参照 2009-09-7)